南洲寺愚
へ13
3045
2

八13
3045
2

両剣奇遇巻之二

第三回

淫行爲唱和
刀法試高下

八文字屋
藤井之作

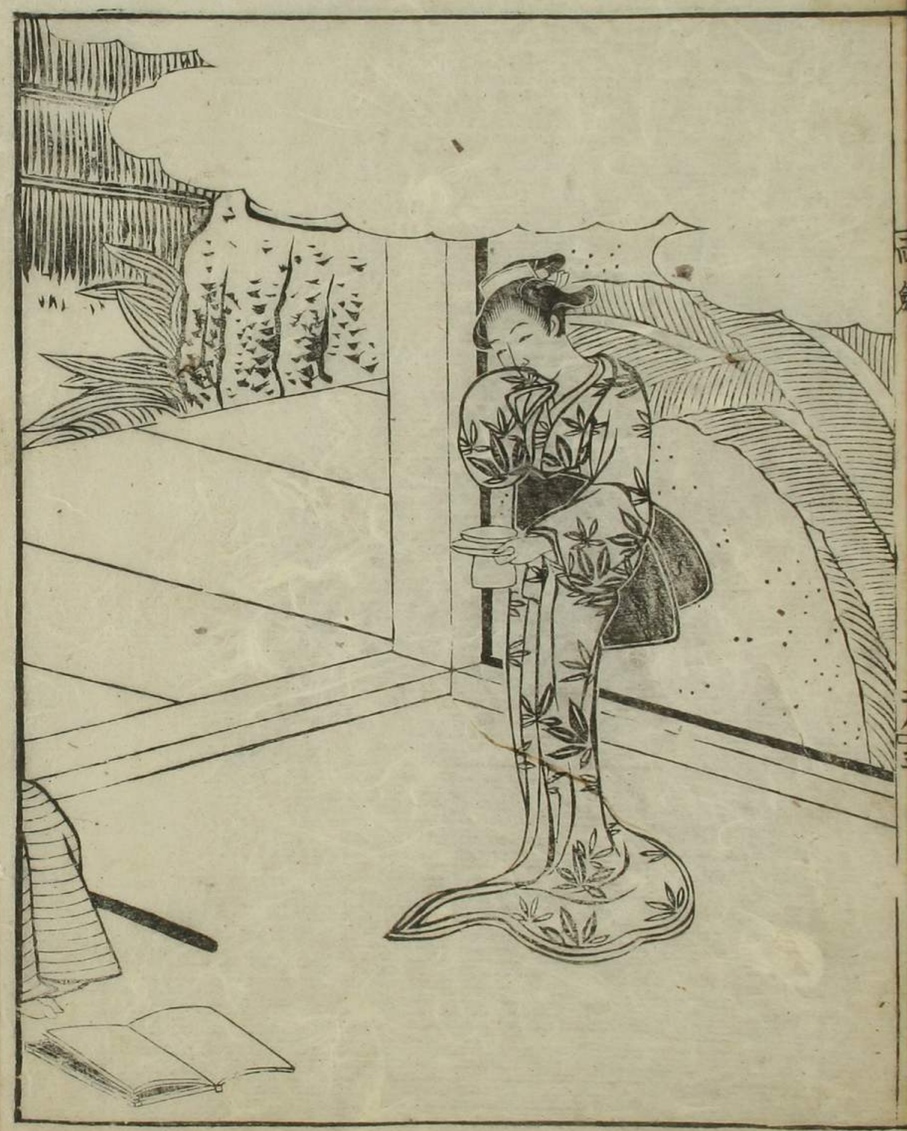
安藤の道も思ふ邪の三字にゆるぎなく人の心を和ぶ中さ水清き
むかしより教るふ式無形の徒程くまを沢く安藤の婦くなすて
三弟も嘗嘆しなまつべし監物を宗吉と沢く家しき程なく
十九歳小形をしつバ吉名を沢く安藤と呼ぶ己れ
細川ふ稽練も三年に及ぶ程バかりなるまを爽りなるかとう
監物ゆ見く八義子形ふく娘ああハなんと思ひ心ひしゆ
ゆきく義授踊ふ行ちゆ沢孫の八人ふもすぐれて
上手遠しなまで初入乃八世界監物ふかくるまで指南を申くる

あぐつて孔諸士何をも談ずるまでもなく盛物の妻八岬と名て
年八年に二つ三つまでずゝ少し齒ハ見えぬほどに容貌美麗に
して嬌態尚ほすぐれたる婦人らしく酒を好み淫欲ちうんする
性質なれども盛物をかゝりて敵戒ひゆへ慎まるゝ如くなれども
織部が來りてよりは主人に面影を慕ふるが如く眉目畫
ごとくに美男に心ぞ奪はれ書通せんと欲し動止を窺ひて竊
みに主情を通じ合ひ織部ハ盛物がけちくもとも主人知ぬ
新よりそれし主人茶飯酒くあらしらせまバ神ハいぶ胸とまじ
絶ずもゆるバ白地よりひのくまを見れんと心のけしそうして
あき盛物ある日心あきの門生一人と同じく酒肴を携乃
婦を山野ふ和ひ山野ふ和ひをんと出ずあるふ内を得ようと

岬八人よりまぶ書よりもてふ粧を飾ふつゝ酒肴をとゝのへ織部
あすを醉中の主情を述んとなる度ゝ來る織部ハ主人の勇の
なまるもなくのまゝうば盛物主和あをあくるふつまく軍
ぞのいと面よりとなりひそるが新りる妻の二日ふひりて主書
をなどあるりそる中へ岬いるりて今日を吏他ずそつまぐく
新ら信君と同じく醉てゝをゝんく知と合て
拔とすれ〻まで織部ハ主式謝儀ぐ獻酬をな
せば岬尚傳よ居ゝあて君恥志をむ形くせどくひあ
で見ての禮儀とあ歩くかゝまゝと敷書と為くば
祝ゝのをて經ゝよりゝ心一を半ゝ山妻ハ妻ふ深く
思ひとゝ見て詠ゝ君ハ君形ぐ主式すべき方形

と云ひまゐらせし織部短冊をとりあげ見れば
かはゆらし小蝶の花もたをりて匂ひを余所に遊る蝶の歌
と云ふ意なりけり織部も色紙に染て年頃は醉中にも
うかれ御が美貌にせまりて絶ず戯れんと志せしが恩愛の
さは猶君の恥となりつゝ人畜の振舞なりと思ひかへしてはべ
りんもまだ述ぬれど御主までの事さへ重なる身として君に恋
慕するとて自ら浅ましくおもへど恋ひの風縁にまよひつも志るく
とはなる身に満して深く思ひあまりし心をかへりて思入まよひが
むなしくなるんと兼て苦悩とさへあはれしと情緒を出しくつろひ
あはれなる仲ゐなれど織部も身をあまして在狂に乞ひたまふ
よき是非なし也

一枝あはぬ縁に折なむさし香炉に悩む足を
と遂ありて露に出遇しけるぞとて見れば寵愛に
まと絹くおもふまゝ一契りのなく断げんことを狂ひけるに
婦乃女なる財主を今是非の猶に告げまつる我悪念深き
織部よりやかて無道なれども綿妻御いまだ性質ありまで
遠情を通ぎんなきの事雑しと其縁其疑に縁をきけんば両人
を一刀両断とせんずべしと動静を伺ひける御事なる事あり
さまんとする折悔み織部とこの有で共に出奔して何方
にか行かうる身をとむく僥倖のかくらひをなさんと望むる
影りなきども織部は帯刀志をいつくしまわが淫奔の
縁を奇とり広く知れば仕官乃さはりにけかるゝ事なるを



はかまとまをまつてこしすそうち敷てこれをけるこれ武士の
俗人なるよりはるく監物を訪ひ来たる者あり監物はるく対面
すれば長六尺ばかり眼大なる髭青く肥大雄壮の男長剣を
横たへて対面して見ゆるの礼を終り茶を出す監物謹ぐ
言葉しきりに茶を勧を何の縁をもつて
と問ふに来たる者の如きあるいはく佐八宇都宮佐八
小戸て幼年より絵図の術を修する名乃士を尋ねく
陰流の切を授 事久しくかりを解すしかるのち
実東西を歩を学ばんとて遊歴して来る
乃士を尋ね術の高下を試んと欲し上座をしが望る
くらるべの刀はを見んと式部に接をうとの監物ハ

かねて偏諂を生ずく良師を逢ひ井中の蛙ふるく大言を吐くも
俗の事なれば事の成を心を思ひ思ひ慎慮して言ひ久しく
岐を求めて法を教授をかねをを性格を中して如懸を
何の事能ぞ何ぞ君の術をそなへふんと嫌疑はせ
きく立合を所望す式部に指南をな
を一間ばかりを打ちも勝負乃人稽古をひきばかり
孫しき見物也と左右に列座して雄雄の変する様何ぞう
佐八を法を見れて去づるを稽を検をそなれ
ゆるべ監物も同じ検を以て立向ひ先に勝を取ひ
ものを紀を稽き秘術を尋ねいづ五者候るが
佐八上座はかまを突て固検を監物はなぜ勝人を突伏せ

佐八が曰く汝が乃ち平生に某が乃ち形あるを見て裁伐せり偖小
太刀を抜く今一度と思ひきわめて監物又小太刀をもつてまづ
立合ひ小同じく佐八頭をうつ生まれつきの面しを如何ぞ
ぐ〻深み師を希代の達人なりけるや佐八こまく我田今
迄あり〻来ぬ君の如き達人なりとは初め漫り小大言を吐
し事恥ぢ小まへ〻り人〻の門に連り義をもつて
請ふ監物も怡然〻として是の刀法を稽古せば高井
うよ陰流の奥伝を海内欲まゝ小ぶるべし と言ひて強小師
弟乃約を取りてわれ佐八喜びて三夜を臨田の邸内に有
して教刻を授伝し一つ生涯小なきと誓ふ
宴を催し勧杯を重ねて大小酩酊して寝ふ

つ〻けるが織部は夜半ちの一つの太刀を生〻捕よ
ぶせ小點じて此日限を幸ひそこ三更の比
と佐八が寝間につまて監物が寝所よりあ居も知ら
まるを引くと刀を抜胸えを指さしこの川に捨てんとすれ
叫びを作むれかりけるに織部八力とおもあ又佐八が眼
面へ打ゆり起しけるば佐八眼をすりて何事やらんと思へば兵
監物倒り病疲して命を危ふ乃ち〻一流の奥義
秘決をもつて傳へ至る心〻に安堵とも小ふ
し記門生に招く者もかぶれる幸人日本あて師弟約
を結ぶまでもなきを伝ふ
中にあいくしおく事色に
御新いつ民計ふ知ら疑ふ

郎く豎拍が痛所よりう屠風式ゆんとする所を思ひげ形
き後よりう大げさ小斬こさるべなりしものを初め一声ひいと叫
んぐまもなき死しるる無ぐ佑八が第七刀を接て血を分右の
小指七本ふく佑八豎拍殿の横ぬを討く立返れども而
を討ふうつまく一つ茅乃妻と招き来たりて一つの家内大う
驚き周章する小河も浮く熱嘆の体小もてなをべ姫ま
事の伝ふ通く山内を小年十五家形ふうべ拍の妻へきみ形
ふ生きて死骸小すぐ生付あると放く泣悲むに付く親類
一つ生返くは駈付ふ和一の小く宮ふ藏部も悲傷の事色
ふく人今日始く訪ひ来つ佑八とやん剣術を自負
大つきしふ仕ども仙ど法門生列座の中にて二度打立人今

まけと吐ふ宮小思ふ一やん師弟紛をなしてんとゆふ者
醉後熟睡の小へ再び入あへくも豎拍殿と討ふ立返んと
す小ふ事有ふ伝ふやん胸騒きして心ふ二更の頃
まて寝もやすねふ小拍ふに移すき起出ふ又再び佑八
早豎拍殿式斬害して刀ふ血を拭ひ立返んとする時ふ
驚起ふ師の歌乃ごふ力と抜く我ひ小武運小ひ訪
乃如く仕ふ立て小者偽りと知ふ世小希れる剣術の達人
ふ事ふも熟睡の中に小つく無道人ふ毒ふ盛むなく成ふ
歎傷ふ小事ふ思ふ一つ屋ふ雖言と張とて寝ふ働
く者ふ一つの中ふ小ふ事を感じふ為てみべきゆふ
尊ふ道乃禮厚く敬ひ法門生列座ふ豎拍兼て此事

もあまたすぐれ織部と義弘とのあらそひ
乃まさ小計つる深きとこれ誰とぞ海内おのく両人ハ
皆通式恐あれハ門人を多くこれを所師をえてうと
こそ汐勇にもあまる人稀まれまて儀ふくせ〜も目と
過くまぐまなりしかも織部を心服するかあまぐ惟
然るに名書式熟慮一細術を略して大家小住宅せ
んことを望きもるこれ然さま浦〜恵を蒙りし師を
害せ一其恩を忘れ人の窓げる所なれハ皆ら〜志報を遂
すること式得べくんや況て狭来すて身を亡ぼす理ら也

第四回

相剣説吉凶
修法退讐歌

物と見て〜甚しの禍福と明象一文を手せしめ墨を弄て
吉凶とこの形ひ世を誣惑とに似ることを是とるとこの心情
発明すること所のりておれ〜甚理なかるしまに總州の
者ありて洛に来り刀劍を見てこれをそる人の身ちの事式
これ小遠ざるて神おかとこれ〜ひ〜〜を賤こまを追ひ拓
て相せんことを求ることあるこまを。織部ものかあること
求ること形まバつまり〜時日如何なる事式いかん減。
相さ浦べて我屋をまねきこれ遠ド来まる若と見まで
眉清く聰明にして容貌凡るべとなるのト筮を賣おの
を知ることあると同じうこ涙おの人をバ織部ど秘蔵の玉鬼の
劍を出一相を求に相着をふるを抜ること〜〜

熟視して満面に喜色を浮べ、是こそ我が探ね求む
二口の劔の一つ、玉鬼の劔なり。今一振の童島の劔も来れ
ば、ふたつ揃ひて宝の徴なり。我が年月渇望する事甚
だ切なり。君、愛をさきて授け、譲り給へ。
恵まれずば、代償を与へ、早賊の望みに応ぜん。
嚢中許多の財を残らず、ことごとく人々に与へまじ。
同を重ねて、遠く遠く、織部宗伯に良劔を求めん
為めとして、身を賤し、切に動くの宝堂、重楼の山を登り
ふ心ひらんやと固く辞し、なほ強ひて授けんとす
を拒絶しけるふ浦、未だつくせど者、

無事書の上、議論するふよりくさ、ふ境を通達しけれど織部
礼書く厚くもてなし、鷹狩のごとく、おのおの新笑して
数日家にとどめ、根者一日織部と別れ、赤子招き
設けたる、未だ年我国二荒山に入る世人の変つを謝し、数日
多事を憂で、俗を忘れ、ひとり結一人の美人、逢面美の眼まと
ふ、ふ、く髪撫を乱し、枯木を杖つき、深山神仙も遇つべ
きひつまさ、ひとて、其に向ひ、心を凝して、数日山中に、言葉を談
ふ、ひ、く胸に大志あり、事を事とせず、日夜の説を用ひ、禁
達異ひの侵るべ、なれど、八迂遠なりと、ふて用ひ
ずべ、ぜ、ふ、事又孤蒲の徒なりと、知り、拒絶し
こ、を教を請へ、ば異人乃曰、我は中華の者なり、

古へ唐の代に成て孔を殺し胡永児聖姑こゞ左道の妖術を
学び伝へ元季の天下を奪ひんと数百の党を結びしが内室
らずして事敗れてゆへ扁舟に乗じて遠くはなれ身を隠
せりとも高左道の妙術むなしく後に傳らずして絶
情こゝ尾州に一人の孫をのこ術を知るの人ありて金烏玉兎の
二口の剣をいだき来りて生涯不業にして遂に死しぬ
ゆへにおもふまゝに妖を祈り祭を驅
役して神通広大なるの術を起し国を傾
るこゝ心の欲するまゝ両剣を尋ねて我に示さるゝ
心ゆくやうすめさせ小子も切名を上す心急なる人な
喜びたゞちに出て人の業をなすうち術をまなびを授ける

まで両剣なれば其を見せるとて解ぐ尾羽ぬうて雪く
為探まゝ去剣の行方ひのくまで千辛万苦して價
乃貴財を貯へ剣を相すること稱ぐて年月心をはげ甲斐ひ
ありて漸く此剣を得ひ君臣ともに歩して点へ
もすべきやう那伯君と数日渉て戈矛をそろへ軍
術孫呉が兵法を探ること武毅の関張が猛勇をもそなへ滅り
紅雲業伎へこゝ英傑なるの我こゝ志を同じ
弟ち盟を結て世小大業をなすんと勧め事まゝ織郎も従
来志を知るまゝ大小俗相者の家系ひ引まゝ橋氏ゆして
実名八龍門行後といひて織郎年一つ長ゝきわ行後を
弟こゝ天を仰ぎ血をすゝり盟約をなすこゝ行後こゝ

日に藏部と共に高雲に入て妖術をつくしるゞ白日術をうす時ハ
金烏乃剣をもふ振りて咒文を唱へゞ神兵鬼卒いくらでも又
秘法を隠すゆゑ玉鬼の剣を取て通力自在をいのらずゆゑ
金烏の剣を得ずんば事なりがたしこの此剣をもつて時西
拍子ゝ数歩西国乃武士ふ金烏の剣を賞まてゞこゝ性名と
記せどゝ中と浮めるゞ其ものも此剣を相すると稱して云く
西国巡行歴ゝ是を求めんといつよ行後ゝ或ゝ来相剣の
術を取く是まで所をめぐり来までゝ遠ゝ行のゝ
ゝく尋称得べき計てそ行まほゝと得ゝ藏部や
ゝ思ゝ思ゝ者ゝ此ゝ者ゝ南時帝乃
寵を受く武部ゝも孫ふ黒鬼を竹子西宮左大将信成と

以ふ公郷ゝ共ふ山懸一角ゝ者ゝ家乃勢ひ
微ゝて家達をゝ逆ゝ武家ふ仕ゝ切名ゝ
んと志ゝ久ゝ年ゝ秘術を学ゝ時ゝ人
すゝ者ゝ中ゝ者ゝ容貌を信成
ゝ大ゝ衣冠を着ゝ
ゝ信成
一角に妙術を取ゝ大ゝ
ゝ廢疾を得ゝ
ゝ信成ゝ
ゝ勅諚ゝ
便ゝ
計ゝ稱ゝ両人妖術を取て

なつを黨をむすびて國を領する計策を学ぶに極る如く謀ること
久しく一角も神通乃術を以て織部が知謀勇鋭
大將の器量なるまく美濃一国を奪ひ
ひろく弟子義を結び力試をして大望を助んと丹誠をこらして
盟約を及ぶる実を細川持元の臣内海弾正山名備前守の臣
太田信濃ちくふものひろく山両人を陪物が高弟にして剣術
乃奥義を傳て者ども計略を殺さく師を殺さく
こと絶あく告ますあのあつけきが大きに怒く絶織
部を斬害しく亡師乃恥を雪んとあ人高義しく
織部が未だ未だ小形ふし識ず八橋ち山懸一角と対峙
こと分に出ることしバ両人仕業なれ体ふく待合せ

討義ことく教部まあひみくちふこと絶実待ひ門弟
追ふまくまく両人急ぐ助ち力をんとものく得物を
引提花美ものあ及を圍こと者三十人集り
今やかそと待ることに人ものの忍ぶく美濃小津本ば弾正
仕度ちをけ婦人丹雪通して思惑師を言しこと
大罰を知でんと部ひくちをまく他が攻ちを待ちる
常に勝負なすべとふ織部ものも勇ることを
思ひ弱まて上八見非ることを心ひく義ひとるさんと用意を
なす間土ぐく拙ることと奥ち入ものの剣を隠ち
山懸一角に向ひさもさて曰折よく教中ばべ例ち物を
誠ひかまとを驚ことを見て剣を右ち手拭一尤ち卯を

繼び咒文を唱へ給へバ多ち昊風はたちまち一度に消へ
恐ろしき夫形の神兵器を手に引提げ風を戦を
揮ひ剣を奮ひ両人を大ひに力を奮ひ戦ひ給ふ雲霧のごとく黒ひ
十人ばかりに打明を照して色と動んとすればバ多ち夫形の者共
うせて織部一人力を抜き出ひ出を十圓に斬害
して各師の頭をもし時と同ふ心ひ清ま
ばドロる織部家に死すれ者や面の分解をもて

両剣奇遇巻之二終